

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, September 15th, 1951. —No. 242

關西大學學報

第 2 4 2 號

昭和 2 6 年 9 月



整理中の図書文庫

關西大學學報局

教授 堀 正 人

終戦後わが国の少くとも一部知識階級における日本人ならびに日本文化に対する自己批判、あるひは自己否定は往々にして自虐の域に達してゐる。もつともそれらの自己批判、自己否定が終戦以前から抱かれてゐた持論、或は蓄積してゐたものの表白であるか、もしくは惨澹たる敗戦後にはかに誕生を見た、社会的混乱との双生児であるかは問ふところではない。何故なら、我々の不幸な現実の直視、従来のあらゆる面における過大な自己評價の清算、ことに終戦とともに齎された世界的展望のうちにおけるわが文化の意義についての省察、それらは兎も角も我々にとつて必然であると共に、当然なさるべきものだからである。就中、世界的展望のうちに自己を省察することは、世界の各部分が加速度的に結合の緊密さを高めて來た現代に

けれどもアーノルドの時代の英国と現代の我が国の情勢とを比較するとき、そこには余りにも大きい差異の存することを知るのである。無論、惡散なアーノルドは、彼もまた「疑惑、論争、狂乱、恐怖の末世」に生きてゐることを意識してゐた。けれども彼の時代は英國の物質的繁榮の最盛期であり、質実な中流階級が社會の指導的地位を占めてゐた時代である。たゞ彼等の新教徒的なヘブライ的な精神の過剰と、「甘美さと光明」とに満ちたヘレニズムの精神の貧困とがアーノルドの如き教養人にとつて堪へがたいものであつたまでである。彼の批評のうちに漲つてゐる苦汁は、言はゞ英國の物質的発展の反面である精神的混乱と低調との醸し出したものである。だが現代日本の場合に至つては決してそんな余裕のあるものではない。従つて我々が世界的展望のうちに自己批判を行ふとしても、それはアーノルドにおけるが如き能動的、積極的なものでなく、むしろ受動的、消極的ならざるを得ない。アーノルドにとつては、彼の自國文化に対する批判のきびし

けれどもアーノルドが説いた「教養」の教義——人間性の完成の教義は、我々にとても信條となり得るのである。そして、T・S・エリオットやまた一部の学者の間に異論があるとしても、人間的・個人的な向上の努力が文化の実体であるとすれば、われわれの人間的完成への努力は、人類の文化的建設以外の何ものでもなう。(Nature and Culture by D. Bidney, Conflicts of Power in Modern Culture 参照) 我々はいまアーノルドの時代の、選挙法改正や労働組合運動や愛蘭士独立運動に伴つて生れた「無秩序」なぞとは到底比べ物にならない混乱の中にあるにかゝらず、否そのためにこそ我々の「完成」と、文化的建設とに向つて進んで行かなければならない。極端な自虐は我々と世界の無秩序を増すばかりであり、世界における我々の存在理由を自ら奪ふものである。勿論、我々が外部の世界の承認を勝ち得ることは望しいことであるが、我々はまづ我々の自身のうちに於てゆるさるる限りの、完成を目ざさなければならぬ。

(13頁へつづ)

社會哲學への道標

教授 田 中 熙

人間は勿論自然環境の中で、それに適應したりそれを適宜に支配したりして生きてゐる。人間の社會生活も亦自然界を基盤として居り、その上でのみ當まれている。人間歴史の展開亦各地域に特有な地理的風土的條件と結びつき、それとの相關において繰りひろげられてゐる。この様にして自然環境の諸特性——大地、水、光熱、風氣、或は氣溫、雨量、地形、地質、地味など——は、人間の生活様式、社會形態、文化や文明の歴史に對して實に大きな關係を有つてゐる。それらの狀況は吾々に對して圧倒的影響を及ぼす。また民族や國家社會における歴史的運命はどの様に變遷しようとも、その舞台であつた山河、平原、海灣などの自然的景狀は、黙々として昔のまゝで存続することもある。斯様にして人間の存在や生活が大自然の環境からして受ける影響は、言葉で盡し難い程にまで甚大である。吾々は自然の中で生れ、それによつて育てられ、再びその中で死んで行くより外はない。吾々は生活の地盤と素材との總べてを、自然環境に負うてゐるのだと言わねばならない。併し他方吾々は、自然環境と並んで社會的状況からしても實に限りなく大きな影響を受けてゐると考えざるを得ない。乃至は多くの場合において人間は、自然環境よりも寧ろ社會環境の方からして、一層超越的な影響を直接に蒙つてゐる。その意味において凡ての人間は、「人間對自然」の關係においてよりも寧ろ「人間對人間」の關係において初

めて、人間らしい人間になつてゐるのである。或は、人間は自然の環境からして自己の生活の全素材を受取つてゐるでもあろうが、その生活の全形相の方はまさに社會環境から受取つてゐるのだと見なさざるを得ない。然らばそれはどういふ意味においてであらうか。吾々は自らの生活を維持するのに必要な凡ゆる資材——例えば食料としての主食や野菜や肉類、衣料としての綿や羊毛その他、住宅材料としての木石や土や金屬類など——を、全く自然界から取得せざるを得ないことになつてゐる。併し吾々はこれらの必需資料を自由に無制限にほしきままに、従つて何の制約も媒介もなしに直接に、取得することが許されてゐるだろうか。文明社會においては明かにそうなつてゐない。茲では高度に發達した社會的・經濟的・法律的・政治的・宗教的な諸制約が確立されて居り、このような諸條件に従つて初めて自然物を取得できるようになつてゐる。無制限に取得できるものはわずかに日光や空氣だけかと思はれるが、併しこれについてさえ國際法上の制約が無いではない。此の事は未開社會においても同じになつてゐる。——唯程度の差が存するばかりである。蓋し茲でも亦人とはそれぞれのテーマやタブーを守つた上で、従つてそれぞれの社會に固有な風習や制度に順應した上で初めて、自然物資を獲得することができるのであつて、決して個人の恣意に無制限にまかされてゐる訳ではない。孰れにせよ一般に人間は生活

第二四二号 目 次

表紙写真	八島治一撮
文化と批判	堀 正人(一)
社會哲學への道標	田 中 熙(二)
學内報	(三)
本館隣接教場増築	就職委員会委員増員
西宮市長校友に推薦	夏季紀南
講演旅行	追放被解除者祝賀会
事異動	人
校 友	(四)
學 生	(五)
趣味の頁	(六)
続校友の面影(6)	(七)
沿線風土記(二)	H・N 生(八)
泊園文庫について	石濱純太郎(九)
コーヒー物語	渡邊 格司(二)
本學所藏重要圖書解題(四)	(一〇)
校友名簿作成のための	K・A 生(三)
校友へのお願い	(四)
編輯後記	

資料を自然環境から求めるものではあるけれども、その求め方即ち形式や様相は明かに人間化され社会化されている。つまり社会的統制の下にある。

自然現象の人間化、自然環境の社会化ということとは、次の点からしても明かであろう。即ち吾々が夜空に仰ぐ無数の星は、少く共一次的には、單なる自然現象としてではなくそれぞれの社会に固有な神話や傳説に彩られて輝いている。その限り天体と雖も一次的には人間化され社会化されている。是を逆の面から考へて、全く非人間化・非社会化されている純然たる天文学的宇宙像——自然科学者によつて想定されているもの——をとつて見ても、尙それは実は、純然たる客觀現象ではなくて、その様な天文学的立証を可能ならしめている社会的・經濟的・政治的な諸條件を根柢として初めて想定されているところである。決して宙に浮いて理論構成されているものでない。だから左様な人間の・社会的諸條件——その中には地動説を唱へて迫害されたコペルニクスの例からしても知られる様に思想の自由、言論の寛容ということも入つて——が充たされなければ、想念される筈のないものである。要するに純自然科学的な世界像や宇宙觀であつても、それが兎も角も思想又は學說として現れている限りでは、云わば暗黙の裡に、人間化・社会化・歴史化されている訳である。——知識社会学が力説している如くに。

もう一つ別の例をとつて見よう。吾々が道路を歩み橋を渡る時、或は畑を耕し薪を割る時、成程吾々の足や手は直接に無機有機の自然物——土や木や石やコンクリートなど——に接触している。併しよく考へて見ると、その道路や橋は社会の多數の人々によつて踏み固められ架け渡されたものである。畑や薪も亦誰れ人

かの所有に屬し、誰れ人かに利用されるものである。即ちいづれも人間化され社会化されている自然事物である。従つて與えられたままの自然物に直接無媒介に接触している訳ではない。何らの意味においても社会化されないで、恒に純然たる自然環境だけと交渉して生きている様な人間は、自然兒とか無法者とか云われるより外はないだろう。

最後にロビンソン・クルーソーの例を取つて見よう。彼は凡ゆる社会的系累や束縛から解き放たれて、直接に氣儘に自然環境だけと交渉しているかと想われる。併し茲でも亦彼の思想や行動を支配しているものは、家郷や知己への絶えざる思慕であり、再び還り着きたいという熱望である。それ故に彼の思想や行動様式を一次的に支配しているものは想念された社会環境であり、それに基づいて二次的に自然環境と交渉している訳である。日本について云えば鬼界ヶ島の流人俊寛であるが、彼が漕ぎ去る赦免使の船を追うて浜辺に歎き狂うのは、それは社会環境が二重の意味——即ち今迄の化しい社会結合とそれから家郷への還郷希望という——において、一挙にして消滅したことに対する余りにも人間の悲歎、錯亂、絶望を示すものである。動物であるならば集團的に群棲している時でも、一匹だけ遠い外国の動物園に連れて來られた時でも、その存在様式を根本的に變へることをしない。併し人間にあつては社会的存在性ということが余りにも一次的本源的な意味をもつている爲に、社会環境の有る無しは彼の存在様式や性格を全く一変させて了うのである。

擬て以上に挙げた様な幾つかの示証から、吾々は次の如き結論と展望とを引き出すことができる。

一、動物は或る程度の意識を有つてはいるけれども、その肉体的・生理的存在性と意識的・精神的存在性とを

峻別していない。従つて差し当つては肉體活動との相關において成立する純自然環境と、心的相互作用として初めて現成する社会環境とをも峻別していない。動物は自我意識や他我意識の區別を知らないばかりでなく、純然たる無機的自然物と自己と同類なる生物体との區別をも知らないでいる。是に反して人間は肉體的存在性と精神的存在性とを本質的にはつきりと區別している。——彼はその精神の働きのよつて自由に肉體界や事物界を否定し超越することができるから。従つて人間は單なる自然物や動植物と、自己と同類なる他者とを、延いては自我の意識と他我の意識とをも、原理的に區別することができる。そこで人間においては特に、自然環境と社会環境——前述の如く前者は差し当り身體的段階において成立し、後者は差し当り心的相互作用又はベルソナの連帶關係として成立する——との両面が峻別されることになつてゐる。

二、人間における動物らしきの方は自然環境との關係において現れるだろうが、人間における人間らしきの方は特に社會關係の中で現れて來る。また自然環境の方は吾々の生活に対して諸般の材料を提供するものであるが、社会環境の方は吾々の生活に対して各種の形相や様式を提供する。更に自然環境の方は一次的に吾々の身體活動を刺戟し、二次的に吾々の精神にもそれぞれの影響を與えるのであるが、社会環境の方は一次的に吾々の精神活動を規制し、二次的に吾々の身體活動にもそれぞれの影響を與えるのである。

三、動物や植物も明かに集團的に存在している、——蜜蜂や蟻や象や猿の生活が示している様に。併し彼らの集團生活は單に外面的で自然本能的であるにすぎない。一見機械的と思われる程にまで所與的で固定的でもある。是に対して人間における社会性は徹底的

に肉心的で深部的で自覚的である。又流動性や可変性、創造性や主体性をも含んでいる。——但し未開人や兒童は寧ろ動物に近く、外面的・自然本能的・固定的に社会化されている計りであるが——。これは人間の社会が本來上、自我意識と他我意識との分裂を通じての結合において成立する以上当然な事柄である。

四、人間は以上の如くに質料としての自然環境と形相としての社会環境との二重の環境を有つてゐるが、前者は經驗的に與えられてゐるのに対して、後者は歴々經驗を超えてゐる。それ程にまで内面化・主体化・課題化されている。——世界国家の理念の様に。又自然環境の方は必ず空間的延長をもつてゐるが、社会環境の方は寧ろ時間的な習俗や傳統に支えられて成立している。更に自然環境の方は可視的で可分割であるが、社会環境の方は恒に必しも肉眼で認められず、部分に分割され難い。そして「存在の順序」から云うならば最初に自然環境が有り、その上に生命体が發生し、最後に人類や人間社会が進化して來たのである。——「認識の順序」から云うならば正反對になるであつて、人間の社会環境が最初に根本に有り、その中から科學的探究の結果生物界や無機的自然界が構成されて來るのである。それは丁度未開人心理や兒童心理において明かである如く、最初には万物が有情者・生命体と考えられ、その中から後で無生の物体が區別されて來るとか、乃至は根本には自他無差別の集團意識が有り、その中から後で自我意識や他我意識の區別が出來る、のと同じである。

五、兎も角自然環境の方は可視可分的であるが社会環境の方は寧ろ不可視不可分的である爲に、前者についての探究である諸自然科學の方は、後者についての研究である諸社会科學よりも一層早く、又一層確實な

業績を擧げて發展して來てゐるということは当然な事柄に屬する。又自然科學においては各科の間の分化獨立が精密であつたけれ共、社会科學の方面ではコントの所謂神學的・形而上學的段階からしての獨立が非常に遅かつたことも承認されねばならぬ。兎も角人間の社会的環境に関しては、科學的研究と哲學的考察との二つ——その間の評價別は抜きにして——が最近に至る迄對立して居り、しかも前者に対する後者の發言權が今日でも遙かに強大であることを吾々は平直に認めざるを得ない。

六、但し自然環境に關しても科學的研究と哲學的解釈との二者が今日でも並存している。——自然哲學、自然科學的認識論、自然弁証法、技術の哲學などとして。併し人間の社会的環境に關しては實証科學的と哲學的との兩探究が、事實としてのみならず權利上でも並存し相補してゐるのである。そして社会科學の方は大体上先進の自然科學的研究方法を模範としてゐるが、社会哲學——經濟哲學や法律哲學や政治哲學や社会倫理學などを含めての——の方は社会關係や社会形象や社会環境の事實を人間存在の全体的意味に關聯させて内側から理解しようとしてゐる。前者は客體化、外側からの分析、觀察と計画などという方法をとるのに対して、後者は主體的の内面化、統一的で直観的な意味の解明という方法をとつてゐる。前者は實証的事實だけについて客觀的法則を樹立しようとするが、後者は意味の聯関を辿つて主體的的可能性に追及しようとする。前者はストリクトであることを、後者はエクザクトであることを標榜する(フッセル)。前者は計号に翻譯するが、後者は直接の實在へ迫ろうとする(ベルグソン)。孰れにせよ吾々としては社会的人間の事象に關しては特に、是ら二つの探究が共に相手を尊重し合つて進むべきだと主張したいのである。

七、ところで並存相補の關係にある社会科學と社会

哲學との中特に後者に着眼するならば、吾々としてはかのフオイエルバッハやデイルタイ等の外に尙次の如き一群の思想家、即ち F. Ebnar, M. Buber, F. Cogarten, E. Brunner, M. Heidegger, K. Löwith, K. Jaspers, K. Heim, J. Cullberg 等の業績に注目せねばなるまいと結論したい。是らの人々は孰れも第一大戰後の危機時代を経て現れた人々である。又デカルト以來ヘーゲルに至る自我哲學や自我一元論に反對して自他二元論の傾向に屬してゐる人々である。又それ迄圧迫的であつたイデアリズムに反對してエグジステンシャルイズムの立場を大体上標榜してゐる人々である。要するに道德的行爲の世界は勿論のこと、自然界の認識でも哲學的思索でも神の認識でもの總べての活動が、少く共現實上では、一元的な孤立自我の立場では現れて來ず、必ず自他相關連帶の二元的立場で初めて現成する、從つて自他相關の社会的範疇が凡ゆる人間活動の根柢にあつて働いてゐると主張するのである。是らの主張にも反面では、余りにもキリスト敎神學的で神祕的な或はベルソナリズム的な前提が存するであらう。その限り反ギリシヤ的で非傳統的な一面が強調されすぎているであらう。併し矢張り此の様な一群の思想傾向からして、今日の人間事物化、人間客體化、人間機械化、人間手段化という大勢にレジストする手懸りが、云い換えるならば「自他」を含めての人間における人間性を回復し、「自他」を含めての人間における主体性や実存性や創造性や目的自體性を新らしく主張しようとする動源が見出されはしないか、と吾々は想望するのである。

但し以上は、社会哲學の中でも特に社会倫理學に主な興味を寄せてゐる者の側からしての結論であり見通しである。私は尙經濟哲學や法律哲學や政治哲學などに携つて居られる諸賢からしての批判叱正を仰ぎ度いと思つてゐる。(五一、八、一七)

學内報

本館隣接教場増築

茲に五ヶ年計畫によつて企劃された本館の二翼をなす教場二種の増築工事は既に起工され、十一月末には竣工の見込である。尙前号に掲載の正門並びに大学院研究室及びセントラル・ホールの工事も順調に進捗し、年内には相次いで完成の予定であり、その際には学園は更に面目を新たにするであらう。

就職委員会委員増員

七月二十六日の理事会に於て就職委員会の委員を従來十三名であつたものを今般左記五氏を増員することに決定した。

大石雄一郎、石井壽一、片川徳三郎、三宅道夫、矢口孝次郎

西宮市長校友に推薦

七月二十六日の理事会に於て寄附行爲第三十五條第二項により西宮市長辰馬卯一郎氏を本学校友に推薦することに決定した。

尙同氏は明治三十年九月より同四十二年五月まで専門部在學

夏季紀南講演旅行

八月二十四日より岡野學長首め六名の教授による紀南講演旅行が行われた。同日和歌山市では市社会教育課主催のもとに市商工会議所講堂に於て公演、夕刻より

和歌山支部有志の歓迎会に出席、翌二十五日には新宮市で市公民館主催によつて同館に於て翌夜に亘り講演を行い多大の成果をあげた。講演内容は左の通りである。

ヒュマニズムの意義
危險の哲學
有馬雪子の歌
三山について
歴代の詩人たち
歴史教育に於ける科學性
政治性

岡野學長
大小島教授
飯田教授
青永教授
高橋教授
權田教授

追放被解除者祝賀會

九月六日日本人と密接な關係を有し、今般追放解除になつた左記の諸氏を天六学舎本部會議室に招き役員に於て祝意を表した。

白川朋吉氏 内藤正剛氏 三好萬次氏 (欠席)

人事異動

専任講師 鈴木 詳藏
昭和二十六年八月六日付を以て助教授に任ずる

本年度後期分 野中 誠 細川 董

昭和二十六年十月一日付を以て頭書の要項に依り講師を委嘱する

教授學會出張

〇森川太郎、堀正人教授 八月二十二日の両日に亘り、京都大学工学部教室に於て、京都大学同志社大学共催の「アメリカ研究」京都セミナーに於けるスペシャリスト・コンファレンスに招請され出席

〇この度中井駿二教授は日本新聞學會常務理事に就任

校友

千里山昭八會

八月十九日午前九時より高槻市川之町の山尾義春氏邸に於て千里山昭八會入月例会を開催、正午迄を娛樂の時間に當て欲談燦笑は盡きる事なく六年間机を並べて苦樂を共にしてきた懐しさをお互いに持つた、今回は恩師河村信一教授をお招きし一同の感激と懐旧の念とは一入強いのものがあつた。午後に入つて平井氏の司會のもとに開會先づ河村教授より回顧談近況等が述べられ次いで出席者各自より卒業後の縮圖を報告、宴に入つた。宴が進むにつれて論議風発笑には、笑ましい情景を露呈した。今後は毎月十五日から二十日前後に例会を開くことに決定し更に出席者の總意により茲一年間の世話役たる幹事に荒川虎一郎、中山謙一、平井三朗、山尾義春の四氏が選ばれた。若き日の感激を引戻すが如き心地にて學歌を高唱して午後五時解散した。

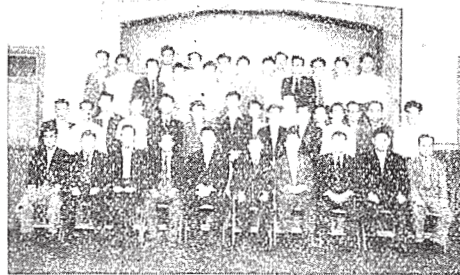
尙当日昭八會の名簿を刊行した。

出席者は次の通り

河村教授、前坂健吉、山尾義春、平井三朗、藤本順二郎、板倉保夫、高橋新吉、齋藤正興、岩橋浩、廣田信吉、大川三三、竹茂辰造、中山謙一、水野政成、宮地正一、荒川虎一郎、尾下龍雄、木下忠夫

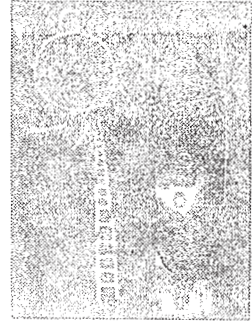
兵庫縣秀麗會創立總會

五月二十五日(金)午後六時より兵庫縣庁社会事業會館に於て兵庫縣秀麗會創立創會が開催せられた。斎藤国臣氏開會の辭に始り、創立總會に至る間の經過報告あり、次いで金則審議に移り満場異議なく之を承認續いて役員選舉に入り其の結果會長に星野正身氏、副會長に細井三郎、実成清の両氏と決定、就任挨拶の後、宮島理事長の祝辭及び最近の教務報



兵庫縣秀麗會

告、経営狀況等詳細な説明あり、又神戸支部長角田好太郎氏より祝辭が述べられ後懇談會に移り午後九時學歌齊唱齋藤氏の閉會の辭を以て盛會裡に散會した。尙同會員数は現在百三十七名で其の中間長は五名である。



学 生

・学友会各部は、夏季休暇中それぞれ来シーズンに備えて合宿に遠征に、各部の技を磨いた、次にその合宿便りを記すと

◎美術部

第三回美術部主催、白鷺

会展を美術の秋に選んで、九月一日より同八日まで天王寺美術館に於て開催、従来の同展には見られなかつた大作と、バラエティに富んだ内容に世評の注目を集めている、先輩川浪君の六尺大の女人像と柔軟な色彩に富んだ数点の作品が、先づ会場第一室を飾っている、同じく先輩塩見君の器用な彫刻が二点出品されて居り、細川、大田、森口、松井のシニールな絵も、その自由さに従来になく雰囲気会場に醸し出している、細川の「墮落した女」松井の「原動力」は面白い作品である、福井の「風景」は、この人の將來を樂しませてくれる、殊に特別賛助出品をされた、河上、須田両画伯の作品が更に本展を意義あらしめている。

◎寫眞部

小西六写真工業会社後援の下に、写真部光稜会展を美術部と同期間同会場に於て開催、九月三日、棚橋、中

藤、仲、平井審査員諸氏の來場を仰ぎ審査会が開かれ、審査員諸氏を囲んで座談会が催された。学校側は学生課次田氏が出席。左の諸君の作品が入選した。第一席大北「海辺風景」第二席「コンボジション」吉田、第三席「波」村上、第四席「路傍寸景」片岡、第五席「波」鈴木その他に大北の、作品A、砂丘、村上の夜景、片岡の池面、八澤の相對、岡山の對照、などが印象に残るが、迫力のある作品には接し得なかつた。尙八月中旬鳥取方面に週日、合宿撮映に過した。

◎グリークラブ

八月二日より一週

間、琵琶湖畔、青柳ヶ浜で合宿、連日長時間を合唱練習に費し、避暑客達に、湖畔の朝夕、男性合唱を聞かせ好評を得、各人声量を培して帰つた。

◎交響樂團

神戸市の委嘱によつて

七月十四日より廿一日まで、神戸市内各中学校を巡廻、演奏会を催したが各地とも多大の好評を得た、引続き七月二十三日より末日まで合宿を兼ね、小豆島へ演奏旅行を試み、彼の地に於いても、この種音楽團に接する機会の少い島の人達に好感をもつて迎えられ賞讃を博した。

◎ユネスコ研究部

夏季休暇はユネ

スコ研究部の最も多忙な時とも云え全國的な会合、研究は多くの休暇中に開催される。七月二十日より二十二日までの三日間、大阪市立大学講堂に於て夏季ゼミナールを開催、参加府下五大学によつて對抗研究会を開き本学は「講和と再軍備問題」の主題の下に、西野、土田、佐藤の三者が参加した。七月二十八日より

八月六日までは滋賀石山で全國学生青年討論会が開催されたが本部員竹中淑子は大阪代表として参加した。八月十四、十五両日北海道大学に於て全日本学生ユネスコ連盟全國大会が開かれたが、本学より吉名、先輩東浦阿君が出席した。

◎英語研究部

七月十四日より一週間

小豆島土庄町に合宿、彼地中学生諸君の英語指導に當り、お互の勉學に資すると共に、島民の父兄から非常な感謝の辭を寄せられ、離島の際には全町を挙げて欲送してもらつたほどであつた。引続き八月八日より開催された國際會議に参加した。尙本学で舉行される予定であつた國際會議は会場の都合で他に変更された。

◎雄辯會

八月二十二日より二十九

日まで徳島縣鳴門市蓮花寺に於て合宿、最終日には同市に於て弁論大会を開催し



九州遊説中の討論研究部

成果を挙げた。

◎討論研究部

七月十六日より二十

五日まで九州各地遊説を舉行、雨天に災いされ日程消化が悪く、九州第一声が四日後の七月二十日、先輩、朝日新聞社福岡支局企劃部兼牧次郎氏の御好意に依り以後、九州各地の日程は全て朝日新聞社の後援により開催、七月二十一日熊本、七月二十三日鹿児島、七月二十五日宮崎の四都市に於て街頭討論会を実施、各地とも聴衆三百余名を集め盛會であつた。

福岡では、聴衆の一人士より「このように民衆の中に學生が飛込み民衆と共に勉強し啓蒙することは私學にして始めて出来ることである」と激励され、部員一同感激した。各地に於ける先輩諸兄の後援も亦絶大なものであつた。

◎社會法學研究部

七月三十日より

八月五日まで、浪江教授、山本弁護士、石尾助手の三氏の参加を得、高野山普賢院に合宿研究会を開き「國家法人税の法社會學的批判」その他各自の研究發表を進行三氏の教示批判を貰いた。

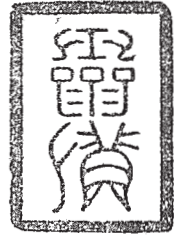
◎筆斗部

さきに相撲部宮脇の渡布

があつたが、引きつづいて当筆斗部パンナム級チャンピオン、福本昌三が日本代表として選出され渡布することになり八月十二日空路東京よりハワイへ發つた。これで本学は、本年に入つて第三八目の選手を海外に送つた訳である。

訂正 第二四〇号五頁第三段五行目「法

三市賀」とあるは「法三市本賀」の誤り、第二四一号六頁中段六行目「池の土をあげたもので古墳で」は四行目の末尾「某氏が來てこれは」の次、即ち五行目の初につづく



関大俳壇

四季近詠

金子 無絃

麦 ふみ

麦ふむや日和すぎての薄くもの
麦ふむや老の片耳やゝ遠く
麦ふむや落ちし風の手どこやらに

奈 良

逝く春や今日は在まさぬ春日巫子
酔ふまゝに行くまゝに奈良の春惜しむ

大 悲 閣

夏山のいくつあなたに比擬あはく

夏足袋のすがしき人と山めぐる

夏菊を活けし花層板の間に

松切れば松の下なる薄紅葉

寂 光 院

板橋を渡れば冬の簑まばら

画棟朱扉粉雪ちり来る男山

大川 双舟

露陰の漣を鮎落りけり
魚拓にす鱸の眼つぶらなる
鮎のわた塩漬にして寝るとせん

植村 久太郎

夏の蝶鏡管像の錦襦に
雲の峰銅盤の水あふれる
楊梅の樹へ披がりく夕焼雲

中 村 枯 木

吊しのぶ忘れられ勝ちに雨づく
晝寝してゐれば風蘭匂ひ来る
雨はれて窓一ぱいに雲の峰

阿久根 砂 村

稲の香に夕ぬかるみの漣きかな
稲の香に日の出かゝりを歩りく哉
稲の香や庭で物煮る山小家

富 永 富 竹 雨

水無月の天白鷺の翔けるのみ
混沌の泥土に天降り田植笠
夕風の憺意風鈴舌垂るゝ
歌枕の松に風鈴鳴りにけり
風鈴や人の話の虚と実と

(カットは吉木一朗教授の篆刻)

関大歌壇

米 島 勉

津 軽 野

弘前市の東北三里の處に黒石といふ町がある。鶴川の代にはさややかな城下町であつた。殆ど祝融の災に罹ることもなく古雅な趣の中に靜かに明るくいきづいてゐる。八甲田の峠に發する淺瀬石川は町の南を貫流し、この川ある故に南津軽の米は常に豊かなみのりをなす。この町にいつの頃からか樺太の日にねぶたといふ行事が行はれるやうになつた。燈籠流しの風習に厄歌ひのわら人形が結びつき、天保の頃から大きな紙張の燈籠に代り、やがて高き十間にも及ぶ巨大な武者の組ねぶたが町々で巡りつづられるやうになつた。舊暦七月に入るとねぶたの花車は町中を繰り廻り七夕の明けて八日の早朝には川に流されるのである。

岩木山日昏るゝほどにふもととべにともしび
あかし弘前のまち

岩木山の裾野ゆつとく青原は日光おしなみ
照り白むなり

眞夏日の照りみなぎらふ津軽野は稲原光り
てかすみ渡れる

城あとの高處に立てば津軽野の廣稻原を風
渡り来る

風おちて暑さ加はる日の後はねぶたばやしの
声おどむなり

この宵やねぶたに時の移りつゝねぶたばや
しは我もおぼえぬ

ねぶた流し果てゝかそけし城あとの風立つ
草生に午後をいこへり

続・校友の面影

— 6 —

京都 駅長

松村睦鴻氏



松村睦鴻氏

◇……氏は大正十五年学部法科の出身昭和二年名古屋鉄道局に見習として国鉄生活のスタートを切り、昭和五年

梅田駅の現場にて活躍され、二條駅助役、運輸事務所、局旅客課、総務課等を経て大平洋戦争勃発後間もなく南方に派遣され佛印、タイ、マライに在り終戦後半年レンバン島に俘虜生活を送られた。帰任後大鉄局総務課副課長、大阪管理部総務課長、業務課長、鉄道公安課長を経て昭和二十五年三月現職京都駅長に就任され鉄道第一線である運輸系統を歴任されて来たわけである。
◇……鑑光日本の心臓京都の玄関を預る氏は次の如く語られる「駅構内に

百五十の農芥箱が配置してあるがこれに農芥を捨てる人は稀で殆ど処かまわず捨てる爲一日六十人の清掃係が八屯車一杯の農芥を処理している現状である。一般の人達の協力により労力が半減で済み浮いた半減はもつと必要ないに廻す事が出来るのだが――

今後鑑光施設貿易と両立して外貨獲得の大きな役割を果たさねばならないがその爲には施設の整備充実を圖らねばならないが貧乏な日本が莫大な施設を構えて外国の鑑光客の満足を得ることは難しいことである。それを補うためにも誠心誠意のサービスによりわが国独特の雰囲気をつくることに努力する必要があると思う」千里山へ移つて間もない当時の母校を懐いづゝ更に今日の母校の隆盛を喜びながらそこに学ぶ学生に対して「社会に出たならばどんなつまらない仕事でも人間に出来る仕事である限り成遂げる熱意を持つて欲しい。我々が望む人々とは眞実目で忍耐強く頑強な人である」熱意と誠意とを要望する氏は鑑光人を射る厳しさの中に第一線の現場から今日を成した苦勞人らしく人心の機微に通じた思いやりと清濁合せ吞む度量さが言葉の端々から受取られる。

沿線風土記

その二

北 長 柄

鶴鳴寺の北三丁の路上に通交を遮るやうに掠の大樹が一本聳えてゐる。その樹下に朱塗の小祠がある。即ち長柄長者の物語に由縁のある鶯塚である。祠の中には藤八大明神と記されてゐる。前掲の大坂繁昌詩に「昔一富門有り、長柄長者と曰ふ。愛する処の鶯死して惜しむこと甚し、爲に其の墳を建つ。墳上に古梅樹有り、元日一鶯ありて必ず來りて綿疊を其の枝上に放つ。年々乃ち然り」とある。

鶯塚より北東に道をとること数丁、淀川堤に達する。毛馬橋が古びた太い木造の橋杭の上に危げに架つてゐる。橋を渡らず右岸を廻ると程なく毛馬の閘門に至る。戦前までは此の畔に鮎の茶屋と言ふ小料理屋があつた。閘門などがまだ設けられなかつた頃には、都心の市人が一日の水遊に、川下の八軒家あたりから弁当持ちで莫盛敷きの屋形船に乗つて此の茶屋まで楽しみに來たものだといふことである。戦災で茶屋も鳥有に歸し、今は夏草の生ひ茂る機跡に僅かに石垣が所在の名残を留めてゐるに過ぎない。そして閘門の裡の水は泥臭く濁り荷役船が二、三行き疲れたやうに舫つてゐて、そのかみ

の水遊行樂の景などは思ひ泛ばないものになつてしまつてゐる。

京より流れ來た淀の本流は此の閘門の北で二つに分れ、本流は南に曲折して毛馬川となり、支流は東に奔つて長柄川



毛馬橋

(中津川)となる。長柄川は明治三十二年大きく開鑿されて新淀川放水路となり、今では淀の本流の綫を呈してゐる。此の毛馬川口に明治末年閘門が設けられ、次いで洗堰が築かれた。閘門と堰とに挟まれた島上には砲弾を立てた様な形

(10頁へ続く)

泊園文庫について

教授 石濱 純太郎

泊園文庫とは藤澤氏泊園書院の諸先生の遺蔵書であつて、今春御遺族御一族及び舊門下の泊園会の絶大なる御好意によつて本學に東洋文学科を新設せられたる機会に本學に御寄贈を辱くしたものである。泊園書院は初祖の東嶽先生から三世四代にして黃坡先生にまで及び百二十余年間大阪文化の進展に寄與せられ再三表彰の榮に浴したものである。惜しむらくは戰災に觸れて講學の場所を失うに至つたが、幸にも諸先生の遺書は疎開されていたので傳存するを得たから、それを學術研究に活用してほしいと云うので御寄贈になつたのである。三世四代の藤澤諸先生のことは嘗て本誌に私が不敏ながら小傳を載せたことがあり、後にそれは拙著の「浪華歸林傳」に收録してあるがこゝに一応簡単に述べて置こう。

第一代の先生は名は甫、字は元發、号は東嶽又は泊園である。泊園とは泊を守ると云う志から取られたもので、講學の場所も泊園塾と呼ばれ後には代々泊園書院と称せられた。讃岐國香川郡安原村の農家の出である。幼年から學問が好きであつたので中山城山に就いて學ばれた。城山の學は藤川東園に出で、東園は菅甘谷に就て學び、甘谷は荻生徂徠の弟子であるから徂徠派の學問を受けられたのである。徂徠派では中國語の知識を持つことを推賞していたから、學問も出来上つた二十五歳の時から三年間長崎へ留學してこられた。文政七年には故郷を出て大阪に來り、やがて中心地の

北船場の淡路町五丁目に泊園書院を開いて徂徠學を講ぜられた。泊を守る町儒者の學徳は自ら世に重んぜられ瓦町二丁目に塾が移つてからは全盛で從學の者極めて多かつた。平野の含翠堂へも出稽古をせられ、豊岡、尼ヶ崎の藩主達も弟子の礼をとるに至つたから、故郷の高松藩でも士分に取立てて大阪居住は故の如しと優遇せられた。元治元年の春には將軍家に京の二條城内で謁見を賜つた。然し其冬十二月瓦町で逝世せられた。享年七十一。先生の學問は徂徠學で終始せられたが、泊園學としての發展は儒學と國體との關係は離るべからざるものであると云う事と、孟子が諸侯に王たるを勉めたのを非難した点とに存する。「泊園家言」一冊にはそれらの論文を收録してある。

第二世の南岳先生は東嶽先生の範嗣で、名は恒、字は君成、号は盤橋であつたが後に藩公から賜つた南岳で世に行われ晩年には香翁の号がよく知られた。父先生に從つて大阪で生長せられ先生及び高弟の中谷南明から學業を受けられ夙成の名が高かつた。父先生の逝世せられた時はまだ弱年であつたが書院の業を落さず藩の待遇も易らなかつた。明治戊辰の役には高松藩は態度が定まらず遂に朝敵の名を受けんとしたので、先生は其間に立つて周旋奔走して藩を救うを得たのであつた。藩主は大に其功を賞し又命じて各藩交渉の局に當らしめ、後には藩政に參與せしめ藩校の督學とした。尙お藩公の命により再び泊園塾を起して育英をも

事とせられた。明治四年廢藩置縣の際には縣吏に任ぜられたが辭して就かず、王政維新の大業に就いて一大決心を以つて塾を閉じて上京し、大に爲す所あらんとせられたが、当路の諸公と意見が合わなかつた。乃ち嘗て泊園の門に遊んだ松岡康毅、郷純造等が新政府に先生を推薦せんとするをも固辭して抗然として歸國せられ、六年に大阪に出でて茲に泊園書院を再興せられた。九年には淡路町一丁目に書院を移されたが、四方より來り學ぶもの多く、丁度西郷隆盛等が九州に隠れた際として当局は間諜を放つて先生の動靜を疑つたと云う。正に天下の注目する所であつて單なる浪華の町儒者ではなかつた。島田蓺村等は先生を東京大學へ薦めた。先生は當時の學制が知識を重んじて倫理を輕んずるを慨し、意見書を大學總長文部大臣に送つて之を論じられたが顧みられないから謝して終に出でず、泊園書院の私學に終始して斯文を弘めて世道人心を維持するを任とせられた。二十八年には從來舊風を守つて世の新奇に走るを戒めようと存していられた頭上の髻を藏つて吉野山中に埋めて鉄石の髻を標されたのであつた。以後は斯文を樂み風雅に興じ悠々たる余生を享受しておられた。大正九年二月逝世せられ享年七十九であつた。先生の學問は該博なる涉獵を高邁なる識見で約制せられ空言を排して致用を旨とせられた。徂徠學を泊園の家説で精選し進んで海外にも推及せんとする雄偉なる泊園學を大成せられた。その要旨は天人參贊、政教一致で公道を天下に行おうと云うのである。「萬國通議」の一小冊に之を論ぜられた。

第三世の黃鶴先生は名は元造、字は士亨。南岳先生の嫡男である。穎悟の天性は父君及び稻垣秋莊の教導の下に學識並び進み尤も氣節を尊ばれた。煥發の才は早く詩作に著れ九歳の童兒の一篇は既に詩家の選に列

したのであつた。少々長じて東京に学び島田篁村の講席に侍した。後筆を載せて支那に遊び曲阜の孔子廟に至り、帰つて大阪高等師範学校に出講したが遂に衆議院議員に推された。議員としては南北朝正閏問題を提げて当局を窮退したが自らも職を辞して帰阪し、其後は父君を助けて斯文の振興を事とした。大正十三年九月に逝世せられた。享年五十。先生の學問は南岳先生の識見を世に推行するにあつたが時至らずして早世せられたのは惜しむべきであつた。得意であつた時も編集して置きたいものだ。

最後の泊園先生は黄坡先生で南岳先生の次男、黃鶴先生の令弟である。名は章次郎、字は士明。家學を受

けて出でて埼玉の高等師範学校の國漢科を卒業された。帰阪して父君を助ける傍ら府下の諸學校に教鞭を執られ我が関西大学に最も長かつた。関西大学に名譽教授の制を設けらるゝや眞先に先生に之を贈つたもの

(8頁よりつゞく)
の改修紀功碑が建ち治水工事に貢献した
沖野博士を称へてゐる。

対岸の毛馬堤は今も都座に煙つてゐるが、享保の昔、毛馬村に生誕した俳人與謝蕪村はこの堤上に草花を摘み大河の遠く様を眺め愉しんだであらう。蕪村が「春風馬堤曲」に添へた書翰に「余幼童之時、春色清和の日には、必友どちと此堤上にのぼりて遊び候」と記されてゐる。岸村の故園毛馬村(現在都座区毛馬町)にはこの驛人を尙ぶものは何も見られな

である。昭和二十三年十二月逝世された。享年七十三。先生は南岳先生の學術を闡明發揚するを任とせられ種々の釋義の著がある。世変後に於ける先生憂患の至情は専ら詩に發していられる。

以上は四先生の略傳であるが諸先生の多數の論著の詳細は何れ編定して世に貽りたいと思つてゐるから詳述はしなかつた。これら諸先生の旧藏書が泊園文庫を成すのであるから貴重な文化財で正に本大学は世に誇つていふと思ふ。その内容は經史子集の四部に涉り和漢を兼ねて具つてゐる。目下目錄を整理作製中であるから一應整理し了ればその何千卷あるかを知り得よう。

私の聞く所にして誤りがなければ、元來泊園文庫は南岳先生の御志であつたようだ。何でも先生の還暦祝賀の時に及門の子弟から記念品として書籍を献上すると、先生は喜ばれて將來泊園文庫を作りたいとの御話を

戴入や浪花を出でて長柄川
春風や堤長うして家還し

の二句に始まる「春風馬堤曲」十八首の中に永遠に消えぬ光耀を放つてゐる。

長柄の橋が史書に現はれるのは極めて古く平安初期嵯峨天皇の弘仁三年に遡る。當時に於てはこの長柄のあたりが淀川口で、北を流れる神崎川と長柄川とに挟まれた地方は、この二川の他に細流が幾つか並行して東西に奔り、豊津のあたりまでは島流きで、昔には海に真近い水流の乱れ勝ちな沼沢地であつたことだけは容易に想像し得る。一旦増水すればこ

があり、皆々其後その爲めの準備をなし種々計劃もあつたらしい。たゞ時機至らず緒につかない内に南岳先生黃鶴先生相次いで世を去られ書院も屢々廻を轉じたので黄坡先生御一家の之を保護せらるゝにも大変なる御苦心があつた。事変終戦となつては泊園の諸先輩の世を謝したのも既に多く最初の文庫建設に關する事情も聞くを得なくなつてしまつた。黄坡先生は泊園書院の復興、泊園文庫の保傳に常に痛心せられていたが又間もなく世を去られた。泊園全体の御意向によつて文庫を岡大に寄贈せられて斯文研究の基礎とせられたことはある意味で南岳先生の未竟の志を盡き黄坡先生

痛心の情を慰め得ると言えよう。たゞこの豊富なる資料、貴重な諸先生の稿本手澤本をして光輝を放たしめ得るや否やは我等の責に掛つてゐることを思えば不敏なりと雖も努力の外はない。本學當局者のよく我々を鞭撻するを祈るばかりである。

のあたりは洪水の難を免れ得ず、爲に橋の架設を困難にさせたのであらう。

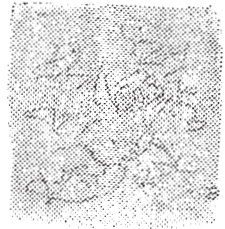
扱て長柄と言へば直ちに口を銜いて來るかの人口に膾炙する長柄の人柱の遺址は現在國鉄東淀川驛の北に位する孤雲山佛生院大願寺の東側の水田に囲まれた光明ヶ池と称する沼沢の中にある。現存の碑は昭和十年に建てられたものであるが以前は池中一叢の荻生が僅かにいはれを保つてゐた。寺中には自ら橋柱となつた垂水の長者藤我大夫巖氏の墓といふものがあり、また後一條天皇の代に發見せられた古橋杭を以て刻んだといふ地蔵尊像

(一名難波の笑ひ地蔵)、天正元年池中より出たといふ巖氏念持佛不動明王像、本章の釈迦金像などがあるが、すべて定かではない。尙前述の笑ひ地蔵の由縁として本學開眼供養法會の際、勅使として参向した藤原公任の歌が遺されてゐる。

長柄江や藻に埋れし橋柱また道かへて人渡すなり
沿線風土記と銘打ちながいつか私も昔の長柄江を渡り、人柱の址を追つてかなり沿線から離れた処まで來て了つた。人柱に就てはまた豊津の所で述べることにする。(H・N生)

コーヒー物語

教授 渡邊 格 司



コーヒー物語はもう何度も聞いたことがあるが、私のコーヒー物語は、カフェイン中毒のために演じた愚かさを書いたものに過ぎなくて、さうした愚かさの中に人間的なあはれさを見てくれた人々は、私のコーヒー物語を面白がつてくれたらうが、私はコーヒー通ではないから、さういふものを期待して読んだ人は失望したに違ひない。今ここに書かうと思つてゐるコーヒー物語も、決してコーヒー通の洒落なものではなくて、もつさりと言ひ掛ける告白にすぎない。しかし誰か私の氣持を理解してくれるだらうと期待しつつ筆を執つたのである。

私は、くり返して言ふけれども、コーヒー通ではない。しかしコーヒーの味はよくわかる。コーヒーの酸味に氣がついてそれを味ひわけるために砂糖も牛乳も加へないで、ブラックで飲んでゐたことが相當なぐく續いた。或るとき口の悪いのが、渡辺はきつと死ぬとき砂糖入りのコーヒーを飲みたいと言ふだらう、と言つたので大いに苦笑した。それから人前で街つてゐるやうな所業はやめにし

た。私は街ぶ氣持はないけれども、ひとは秘かに街つていやがつて嫌なやつだと思ふに違ひない。他人にそんな迷惑をかけるにも及ぶまい。みんなでコーヒーを飲むときは人並にしてゐたらよいので、酸味が味はひたかつたら独り靜かに家をやつたらよからう。

私はぜいたくは言はない。MJBのコーヒーで結構だ。ブラジルコーヒーと言ふと人が馬鹿にするが、ブラジルの上等——そんなのがあるのか否か知らないが——はうまいと思つたことがある。ジャマイカ産といふ豆を自分で搦いて挽いて煮て飲んで、これはうまいと思つたこともある。さういふ時に、各地の豆を標本のやうに集めて、形状や味をくらべようといふ氣は起きて來ない。むしろ私はどんなコーヒーでも氣樂に飲む自分でありたいと願つてゐる。どんなコーヒーでもと言つても、代用コーヒーなどいふのは願ひ下げだが、まあMJB程度を文句言はずに飲む自分でありたいので、それからそれへと微妙な味を追及して行きたいのである。

それなら誰でもさうだよ、と人は言ふであらう。ところが私は自分の心を意識的に抑へて行かないと、コーヒーの味を追及することに没頭し兼ねないのである。大袈裟にいふならば學業を抛棄してコーヒー店のコックにでもなつて専らコーヒーの味に憂身をやつし兼ねない危険があるのを感じる。まさかと思ふ人があるかも知れない。それなら、かういふ例がある。コーヒーと直接の關係はないが、私の癖をあらはす一例ではある。

私が謠曲を習つてゐた頃のことだ。水道橋のそばの家元の人に素謡の稽古をつけてもらつたとき、習ひ出して一年目です、と言つたら、ではと師匠が一とふし私が一とふしと後をつけて謠はせて見て、一年といふのは嘘でせう、と師匠が言つた。自分がこの流儀の発声法に従つて謠へるやうになつたのは長い間の稽古の賜である。誰にお習ひなつたか知らないが、一年でそんな正しい発声ができるとは可笑しい、と師匠は私を怪しんだ。一ヶ月づけて通つたら、どちらにお勤めか知らぬが、まだお若いから本氣にこの道に入つてやりませぬか、と勧誘をうけた。私は西洋の言葉を勉強してゐるので、相手の口許を見てゐてその発声をまねるのが上手でなくては、まあ先生はつとまらぬ道理である。外ならぬ家元の人からの勧誘なので私もいささか動揺したが、一方では私の袖をひき止めるものがあつた。と言つても親に相談して諫止されたのではない。私の心の底に私を引留めるものがあつた。二三年して遂に謠曲から離れて落しにくいやうになつた。

まだある。いまの家に住むやうになつて文樂の關係の人に知り合つた。その人は熱心に文樂を教へて下さつた。文樂の世界に魅せられさうになつた途端に、私の心の底に何かそれを遮るものがあつた。私はきつと文樂に淫してしまふだらう、それはいけない、と何者かが囁くのである。まだある。ふと自分の周囲に將棋が流行しだすときがある。みんなが指すので私も加つて見ると、大抵のとき私が一番強い一人である。それから本式に將棋の研究がはじまる。二三人は凝つてしまつて本業を忘れる。その頃には私はすっかり將棋をやめてしまつてゐる。さうしたことが今までに数回あつた。私はつひに將棋に淫することなく、従つて上手ではない。よく雑誌に出てゐる詰將棋の問題があるが、あの程度のものなら城東線の天王寺梅田間で解けぬ問題はない位のところである。囲碁も麻雀も乗馬も陸上競技も庭球も、もう少しやれば本物になる。一步手前でヘンムングが起きてくるのが私の癖である。従つて戸外競技も室内遊戯もしないものは殆んどないと言つてよい。

いかに懷疑的な讀者でも、これで私の癖を信用して下さるだらう。そこで話を

もとへ戻して、コーヒーのことを少し書いて見よう。

もつともコーヒーを語るほどの柄ではないことは自分で知つてゐる。本當のコーヒー通の前に出たら、てんで問題になりはしない。そんな私であるのに、戦前のことだが、京都のさる所にコーヒーの素的にうまい家があると聞いてゐたので、九州から上京する途中で下車してその店を訪ねたことがある。また浩一路のコーヒーに敬意を表したり、チャーマン・ペーカリーのウインナ・カフェにまさる逸品はあるまいと一人できめてゐたこともある。いまの大阪のコーヒーは大した進歩だが、あの時代のことを思ふと、まだ戦前に復したとは言へない。しかし私はそれを大阪のために言ふのであつて、私がそこまでコーヒーの美味追及を望んでゐるのではない。

それは何故か。私がぜひ聞いてもらひたいのは、かういふ事なのだ。かうしてコーヒーが洗練されて行き、人々が味覚の鋭敏さからコーヒーの味を追及して行くのは、決して健全でないと思ふからだ。つまり病的嗜好なのだ。言葉をかへて言へば、デカダンスなのだ。廢頤の味なのだ。健全さの衰微なのだ。文化が爛熟して、その頂点に立つと、デカダンスの文学を生む。あの現象が味覚にあらはれたのだと、私は言ひたいのである。

日本のお茶にしてもさうだ。九州にあ

たところ、細川侯の廟に野立てが催される。私も招待されることになつてゐた。舊臣たちの居並ぶ中にまじつて坐るのは、私にとつて修養にはなつた。山ふもとの幽邃な庭園で、老杉の下蔭に、苔をしとねに坐つてゐると睡くなるやうな秋の日だつた。毎年さうだつた。定紋のついた幔幕をすつと張りめぐらすと、物々しくてよいものだ。かうした封建的なクルトとしてのお茶だつて、氣合ひがかかつてゐて一寸そこいらで味へる茶ではない。節約家として祖先傳來の細川家でも、このときの茶はさすがである。この野立ての世話役をしてゐたのが春風堂といふ葉茶屋の主人で、その店へ私がつまらぬお茶を買ひに行くと、まあ、まあ、てんで、まづ坐り直して、瘦せぎすの主人が肩がこりはしまいかと案ぜられるほど慎重な姿勢をして、お茶をいれてくれたものだ。滴にして五六滴もあるか、みどり深い茶である。じつと私を見つめる主人の顔が、白い上にうすく青白さを湛へて緊張してゐる。絶品だつた。

十年ほど前にいまの家に住むやうになり、何かのきつかけで天下茶屋の主人と知り合つた。戦災であの屋敷も焼け、いまは蔵ひとつ残して荒れ放題になつてゐるが、あの屋敷の泉水を前にして薦められたお茶は、実にまたおいしかつた。何も予期しなかつた私は、これはまた本當においしいお茶ですね、と思はず嘆息を

発したのだが、初対面としては随分はしたないことだつた。主人の氣安な應對に心をゆるめてゐたからだつたらう。うちは水道の水は使はないで、屋敷内の井戸水なんですがね、と主人は答へた。なるほど紹翁が点じて、太閤秀吉が賞美したお茶はこの水だつたのか、数百年の時間を超越して、歴史の一部が現実にをどり出たのである。私が迂闊であつても、私の舌だけは眠つてゐないで歴史の一片をとらへたのだつた。

これらの日本茶もまた日本文化が成長し爛熟して頂点に達し、そこから生れて來たのだらう。だから人は茶の至境を説いてやまない。第二の人は美味求真の與義を開かせてくれる。第三の人は IN・VINO・VERITAS を通説の如く解釈せず、然り、酒中にこそ眞理ありぢや、と膝を打つ酒仙である。第四の人は紫煙の三昧境について語り、盡くるを知らぬ。いづれも涅槃の境にあるが如くである。ニルヴァーナこそは我々の到りうる至境である。世の雜音から遠ざかつて、人は我を忘れなくてはならぬ。そのとき人は執らはれてはならぬ。そのとき私はコーヒーの商標に左右されてはならぬ。そのとき私は諸曲のシテだりキだと争つてはならぬ。そのとき私は將棋の何段だ何段だとこだはつてはならぬ。そのとき私は何の茶で何処の水で茶碗の銘は何とこだはつてはならぬ。それらに拘泥する

のが健全でないものであり、デカダンスなのだと言ひたいのである。
学生諸君はこれを読んで、僕らなど少しも拘泥してゐませんよ、と言ふだらう。学生は若いのだ。彼らはまだ彼らの中に爛熟をもたない。些かの味覚の差を蹂躪する食欲をもつてゐる。肺を病み、胃を病んだら、味覚を云々するやうになるだらう。私は自分の味覚の鈍感することを望み、健全になりたいと願つてゐる。このごろ関大の食堂のコーヒーを講義のあとで飲むと、大変おいしい。その位の味覚で私はありたいのだ。

馨り高いコーヒーを

閑靜で 明るい ビルのルームで

御用談に、御休息に

純喫茶



ダイヤモンド・コーヒー

天六阪急ビル五階 Tel. 堀川(35)3087
営業時間 9.00—18.00

本書重要図書解題 (其四)

6 Rousseau, J. J. : *Emile, ou de l'éducation*. La Haye 1762. 4 vols.

ルソオ著「エミール」ヘーゲ 一七六二年刊 初版 四冊

「造物主の手を出る時は凡ての物が善であるが、人間の手に移されると凡ての物が悪くなってしまう。人間は或る土地に他の土地の産物を生じさせようと強いたり、或る樹に他の樹の実を結ばせようと強いたりする。氣候も、風土も、季節もごちやごちやにしよう。」(平林初之輔訳)。これは「エミール」の劈頭の文章である。自然を崇拜するルソオは「エミール」において、自然説を教育論に展開したものであつて、児童の自然的個性的發展を説き、感情の養成を論じ、エミールと云う児童に理想的教育を施すところを描寫したのである。「エミール」は當時の社会に異常なセンセーションを興え、本書の出現によつて大いに教育論が検討された。一七六二年にパリとオランダとで出版したのであるが、當時のフランスでは、宗教や政治に関して、少しでも自由な意見を發表しようものなら、非常な迫害を受けねばならなかつたのであつた。パリーの高等法院は「エミール」を押收し、焼却を命じ、ルソオに逮捕令を發したのである。

ルソオ (Jean-Jacques Rousseau) はフランスの啓蒙思想家で、一七二二年六月二十八日スイスのジュネーヴの時計師の家に生れた。母は彼の生後間もなく死し、父とは十才のとき死別した。それから従弟生活、放浪生活をつづけた。一七四一年パリに出た。そして學者文人と交り、殊にデイドローとも知り、百科全書家の仲間に入つた。アカデミーの懸賞論文に「學藝論」が當選して、學界文壇に名をあげた。彼は性質人と相容れないので、一七五七年に仲間を脱退した。一七六二年「社会契約説(民約論)」と「エミール」とを出版して、政府の忌諱に触れ、逮捕されんとして、ようやく故國スイスに逃れた。しかしジュネーヴ市会も亦彼を圧迫した。一七六七年ヒュームの招に應じて英國に渡つたが、十八ヶ月以上は統かずに帰國した。そして憂鬱と恐怖症によつて狂的となり、諸方を流浪の後、一七七八年七月二日エルムノンザイルに逝去した。

ルソオには、「エミール」の外に「學藝論」、「人間不平等起原論」、「新エロイズ」、「社会契約説」、「懺悔録」その他の著書があつた。本書所蔵の「エミール」はオランダ、ヘーゲ版の初版で四冊になつてゐる。

7 *Œuvres de Condillac*. Paris 1798. 23 vols.

コンディヤック全集 初版 パリー一七九八年刊 二三冊

コンディヤック (Étienne Bonnot de Condillac) はフランスの哲學者、一七一五年九月三十日グルノーブルの貴族の家に生れた。幼時は病身であつたが、長じては、ルソオ、デイドロー等の友人となつた。ルイ十五世の孫であるバルマ侯エルディナンド(當時七才)の教師となり、多くの著作を講述した。又ミューロー修道院長でもあつた。一七六八年フランス學士院の會員に選ばれた。晩年ボーガンシー近くのフリーユーに隠退したが、一七八〇年八月三日逝去した。

彼は近世の感覺論の代表者であつて、ロックの系統を引き、一切の認識の源泉として、感覺のみを認め、注意、判断、推理、反省等の精神作用をその變形に過ぎないと論じた。著書には、「感覺論」、「体系論」等数種あり、凡て全集に收められてゐる。全集は、一七九八年初めて二十二冊と遺稿一冊と合せて二十三冊 (G. Arnoux 及 Mousnier 編) となつて出版されたが、本書はこれを所蔵してゐる。その後一八二二—二三年に二十一冊本 (A. F. Théry 編) が出た。

四、商業と政府、(五一—二二)はバルマ侯の教育のための勉學課程) 五、文法論、六、思考術、七、筆記術、八、推論術、九—一四、古代史六冊、一五—二〇近代史六冊、二一、歴史研究について(二二)、論理學(一七八—二三)遺稿 (La langue de calcul)

(以下よりつづく)

その決意と努力とさへなくして世界における我々の存在を要求することは決して正しくないであらう。

だが、言ふ迄もなく我々は偏狹な、安易な自己肯定の中に安住してはならないアーノルドにおいても、教養とは世界において考へられ語られる最上のものを捉へることであつた。我々の文化の隔絶性を適用した狡猾な独善主義の如きは固り許さるべきではない。また我々が英國人より、きびしい批判を受ける点の少い立派な國民だとも、またそれに堪へ得ないほど弱い國民だとも私は思つてゐない。が同時に卑屈な、不生産的な自己否定そのものもまた十分に批判されるべきである。我々の批判の眼は常に両面に向つて大きく見開かれてゐなければならぬ。そして我々の進むべき、我々と人類との完成に通ずる道を明かに、誤りなく照らしてゐなければならぬ。

関西大学英語学会編集

ANGLICA

No. 3

昭和二十六年九月末日刊行・定価八十円

Predication & Predicatives 山本忠雄
アメリカ音韻学の展望—Phonetic Analysisを中心として— 増山節夫
アメリカに於ける言語学界概見 吉田弘重
Number の宿命 空西哲郎
Woolf & Mrs. Dalloway の Ing-Nexus 吉田安雄
書評—Shakespeare の英語— 山本忠雄
研究室閑談 山本忠雄

大阪府吹田市千里山（関西大学内）

発行所 関西大学英語学会

校友へのお願い——校友名簿作成のための——

従来校友名簿の整理を行つて来て居りましたが各位の要望に應えて今回名簿整理を一層促進すべくカードシステムを採用し、又その他の設備を整えて名簿作成に大章になつて居ります。何分四万有余の会員を有する本学に於ては戦時戦後の慌ただしい情勢の下にあつて校友各位との連絡も充分でなく名簿整理に困却を來して居ります。就いては本誌購読者各位は勿論、お知合いの校友の住所、職業、勤務先等近状をお知らせ願えれば幸甚です。又お知らせ下さる点に於て重複は無いとせん故御存知の限り一人でも多く左記宛お知らせ下さる。尚各校友の卒業年度、部科別も併せてお知らせ下さる。

昭和二十六年九月

大阪市淀川区長柄中通二丁目

関西大学校友課

電話堀川(35) 1103・1104

【編輯後記】

◇大阪は今夏は夕立さへ見ない早天続きで、夏に附きものの雄大な入道雲も殆ど現はれず、風に千金の貴さを感じる日々であつた。長い炎天を破つて四十一日振りに到來した雨は例年より早く秋を呼び九月に入つて順に涼しさを加へて來た。

◇田中照教授からは社会哲学に対する有益なる一文を頂戴することを得、新原の号の巻頭を飾り得た。また石濱純太郎教授からは追國文庫に就いて、同文庫を育て來つた浪華の儒家藤沢氏三世四代の足跡を示す貴重な文を頂くことを得た。表紙写真に示す如く先般藤沢家より寄贈を受けた追國文庫は目下整理中で整理の担当は東西学術研究所員石濱、高橋、森井の三教授、三上助教並びに補助員の長谷川一高教授が行つてゐる。多藝多能によつて名の高い渡辺格司教授からはコピーに關する興味深い隨筆を頂いた。教授は通人振ることを避けてこの度はその一端を示されたに止まつたが、編輯者としては教授に該博なる知識と豊富なる体験とを以て世界中を駆け廻つて頂きたかつた。今後とも諸教授の教壇を離れた生活に於ける隠れた知識を大いに發表して頂きたいものと念じてゐる。

◇趣味の頁も今号はかなりの賑はひを呈した。教授、先輩諸兄より多数の寄稿を受けた、金子無絃氏は現本学教授金子又兵衛氏、富永富竹雨氏は弁護士富永竹夫氏大川双舟氏は前代議士大川光三氏、植村久太路氏、中村枯木氏は弁護士植村久太郎氏、中村敏雄氏

昭和二十六年九月十日印刷
昭和二十六年九月十五日發行

關西大學學報 第二四二號

一年誌代費 二〇〇〇円（送料別）

大阪府淀川区長柄中通二丁目
關西大學 學報局
編輯人 中村 浩

大阪府北區堀川橋町七

印刷者 株式會社 ナニワ印刷所

西 井 龍 監

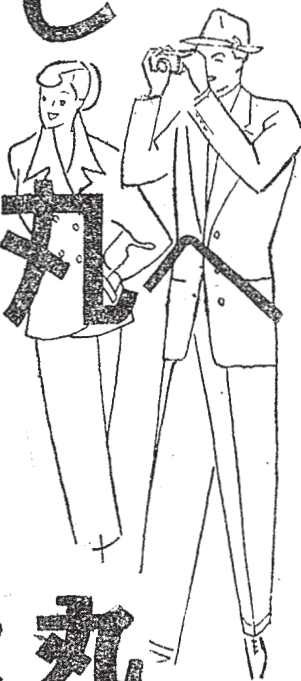
發行所 關西大學學報局

電話堀川(35) 1103・1104
振替 大阪二六七五番



お買物は
いつも

大丸



大丸

京都・大阪・神戸